

嘉永6年の「富山藩薬品会」開催とその出展品

－越中での博物的本草学受容の視点から－

吉野俊哉*

はじめに

近世以降、売薬を主要産業とした富山藩にあって、生薬学としての本草学がその品質と直結する実学として重視されてきたことは度々指摘されてきた¹⁾。

しかし一方で近世中期以降、本草学は様々な要因から生薬学の範囲を超え、物産学・博物的な内容へとシフトしながら隆盛してゆく。富山藩内でそのような本草学がどのような人々によって受け入れられていたのかは、江戸本草学とのつながりが深い前田利保の個人的な業績を除いて、これまでほとんど論じられて来なかった。

幕末期富山藩内での本草学の水準がわかる出来事に、嘉永6年(1853)の「富山藩薬品会」開催がある。その事実については知られているが、出展品の内容にまで踏み込んだ論考はまだない。

筆者は、立山博物館の平成11年度秋季特別企画展に伴う調査の中で、同薬品会の出展目録『富山藩薬品会目録』記載名称から出展品の推定を試みた²⁾。その結果、越中での博物的な本草学の展開に関して、二つの事実が明らかになった。

一つは、これまで「薬品会」という名称のためもあって「薬草・薬石など」と一括りで紹介されていた出展品の実態は、実際には生薬類が主体ではなく、同時代に各地で開かれた同種の催し(以下、「物産会など」という)と同様、著しく博物的な内容であったこと。もう一つは出展品の産地が他国、海外など多岐に亘っていると同時に、越中での開催を特徴付けることとして立山を中心に採集された高山植物類の出展が多数見られたことである。

これらの事実から「富山藩薬品会」とは、越中国内だけを収集の対象に、限られた好事家が開催したものではなく、その時代の全国的な情報ネットワークの中において開催し得たものだったこと、同時に越中の風土・地域性に因った内容も備えていたことが読みとれる。そしてこの事実からは、幕末の越中でそのような会が開かれた意図は何だったのか、という新たな疑問も生じる。この「富山藩薬品会」開催を、幕末期の越中本草

*富山県 [立山博物館]

学の一つの到達点と見るならば、その実態を明らかにすることは、越中での博物的な本草学の展開を知る上で重要な手掛かりを与えるだろう。

そこで次章以下、「富山藩薬品会」開催の実態を、同時代の物産会などの開催事例との比較、富山藩内での位置づけ、そして『富山藩薬品会目録』に載る出展品の種類やその産地の特徴から考察する。

1 各地での物産会など開催例との比較

1.1 物産会などの開催状況

宝暦年間頃から物産会などを開く動きが見られはじめ、幕末まで三都を中心に多数開かれた。目録、日記などの記述から確認できる開催例⁹⁾を年毎に並べると、大きく見てそのブームは二回、また開催のピークが三つ見られる。最初のブームは宝暦8年(1758)頃から明和4年(1767)頃までの約10年間で、明和元年(1764)にピークがある。この時期、三都以外では熊本で定期的に開かれている。(付図参照)

その後、しばらく全く開かれぬ時期や、江戸だけで開かれたという低調な時期が続くが、文化文政頃から幕末にかけては再度ブームが続き、天保から嘉永頃にもピークがある。

その頃には庶民の自然界への関心の高まり、珍花を求める園芸ブームなどと呼応するかのように、物産会などでは、より幅広い内容とより多くの出展品を求めるようになったが、これは全国各地にいた同好者による情報ネットワークなしには成し得ないことでもあった。つまり物産会などの量と質の高まりの背後には情報量の拡大と支持層の拡大もまたあった訳である。

富山藩薬品会が開かれた嘉永6年頃は、全国的な視野で見ても物産会などが盛んに開かれたブームの中にあつた。それと同時に、この年は越中本草学史にとっての成果が続々と現れる重要な年代でもあつた。『奇草小図』、『本草通串』の刊行、利保の金剛堂山での採薬行がこの年に行われている。越中での本草学への関心の高まりの現れとして、これらが集中しているのは偶然とは思われない。富山藩薬品会の開催は必然的にその機が熟していたと見ることができるだろう。

1.2 物産会などの特徴と主催者

通常、物産会などの会場では持ち寄つた出展物の鑑定・検討が行われていた。これは、この種の会が元来、本草に関するセミナーから発展する過程で、ずっと目的の一つとさ

れてきたことであった。

当時、医術や薬方などの知識や技術が、秘伝として子弟だけに伝授されることが多かったのに対して、このように多数の同好者が一堂に集まり知識交換を行うこと自体、新しい発想による活動であったと指摘する見方¹⁾があることから、このような活動の意義は大きいものであったと考える。

また、物産会など開催の目的は、主催者の意向、開催地の土地柄、時代性などの要素によって様々な側面を持つものであった。例えば「研究会・生薬などの真贋、品質を検討するもの」、「見世物・一般庶民に珍物奇品を見物させるもの」、「実習・実物を使って子弟に知識を与え識別眼を養うもの」、「天産物見本市・産物開発も視野に入れたもの」、「品評会・好事家が収集した物品の優劣、審美を行うもの」などである。そこには、開催の定式は整っているが規模や趣旨も様々であった、近世本草学に依拠する物産会などの実態が見えてくる。

■開催のタイプ

主催の主体で見れば、好事家・同好者による結社や学塾が主催したものと、藩の医学学校などが主催したものの2タイプに分けて考えることができる。出展物の傾向を目録から見る限り両者とも大差はないが、前者の中には主催者の意向で、出展品を岩石に限定して品評する「奇石会」や、出展品のテーマを決めた企画性のある会を行う例も見られた。また後者では、その藩が進める物産開発・殖産興業政策に直接的に結びつくものであったり、藩の医学館に学ぶ者にとっての教育面にも資する意味から、実習や研究会の意味合いが強かったように思われる。

このような催しは先ず三都で前後して始まり、のち地方都市でも開催されるようになった。一口に三都と言っても、それぞれに地域的な特徴が見られた。江戸では医学館(躰寿館)でコンスタントに開かれていた他、初期には平賀源内、田村藍水、後年には福井春水など、会主を務める力量のある者が現れる。また他国から様々な階層の人々が流入することで、当然この分野に関心を持つ層も厚く、また会の開催を求める声も大きくなっていったのであろう。それは時代が下ると他の地域に較べて興業的、見せ物の要素が強くなる点に表れている。

京都は本草学塾の伝統の上に成り立っていた。京都医学館主催の例もあるが、内藤剛甫、水野皓山、百々俊道などが市中の寺院などを会場に度々開催している。中でも特筆すべきは山本亡羊以降の讀書室物産会で、文化年間から幕末までほとんど毎年開かれていた点は注目される。また大坂では宝暦頃には戸田齋、幕末にかけて栗山静庵、小林正

見、岩永文禎などが頻繁に開いている。

その他に名古屋では、天保3年から尾張医学館が開催した他⁹⁾、本草学への関心が広がると市井の本草家が「菅百社」という同好会を作り頻繁に開催し、幕末にかけて三都に次ぐ一大開催地となった。

一方でそれ以外の都市での開催は和歌山、熊本、福井、伊勢などで複数回、富山、長崎などでは一回が記録に残るだけである。

当然、物産会などが開かれた都市にはその主体となる人々の他に、それを受け入れるある程度の同好者層が存在していなくてはならない。三都はともかく、一般の同好者層がそんなに厚くはない地方都市での開催となると、京都で本草学を修めた者が地元に戻って開いた伊勢・長崎等¹⁰⁾の例を除いては、藩の医学館などの組織が主体となるか、或いは主導して開催した例が多い。熊本、和歌山、福井での開催¹¹⁾はいずれも藩の医学館が主催したものだけが記録に残っている。

地方都市での開催という点で、富山藩薬品会はこれらのケースともまた若干異っている。当時富山藩には医学館の組織はなく、そこで学ぶ者を支持層とするタイプにはなり得なかったし、市中で会主を務めるほどの本草家もまた存在していない。

このような土地で物産会などを開催するためには、まず、開催を主導する者だけではなく、それ以前から支持層を育成、或いは組織する者もまた必要であったと考えられる。

当時の越中は、売薬を生業として生薬に触れる機会の多い土地柄だったように思われるが、そのことが、藩の雰囲気や自然と物産会などの開催へ向かわせることはない。博物的な内容を付加させ、物産会に結実させる大役は、その知識量と影響力を考え合わせれば前田利保以外には考えられない。彼が富山藩薬品会を開くために、表向きどれだけ主導的な立場に立っていたのか記録は残されていないが、富山という土地でこのような会を催すためには、利保による強力な主唱と、いろいろな機会をとらえて関係する知識を普及させるといった支持層の育成が不可欠であったと考える。そう見ると、結果として、藩の内部から開催の動きを見せた点で、富山藩薬品会は藩医学館が主導したタイプに近いものであったと考えられる。

地方都市での物産会などの開催では、強力に推進する者、ある程度の支持層の存在だけではなく、その他に時代や土地柄の影響もまた指摘できる。

例えば、熊本藩での物産会などは宝暦8年(1758)に始まり、熊本藩医学校再春館では3回開かれたが、これは地方都市としては最も早い例である。しかし明和元年(1764)を最後に全く途絶えたのか、或いは規模の縮小などで記録に表れなくなったのか詳細は不明だが、それ以後の開催記録が残されていない。

この熊本藩での物産会は、開催を推進した村井椿寿⁹⁴が医学校再春館の中心にいた時代に開かれたもので、のちに彼が吉益東洞へ入門のため熊本を出て京都に行く時期と、開催記録が表れなくなる時期がほぼ一致する。村井の後に、藩で物産会などの開催を推進する中心人物が現れなかったためとも思われるが、そう見ると医学館という組織での開催であったとはいえ、実務的にはかなり強力な個人の資質に負う部分が少なくないようにも思われる。

また別の例として、加賀藩では本草学に造詣の深かった前田綱紀以来、稲生若水、向井元升、内山覚伸などの学者が全国レベルの質の高い成果を残しているが、結局物産会などを開く方向には向かわなかった。つまり、本草研究のレベルの高さは開催の動きに必ずしも連動していないこともある訳である。

富山藩と加賀藩を比較した場合、加賀藩で物産会などを開く動きがなかった理由は三つあったと考えられる。一つは市中や藩の中心に富山藩での前田利保に当たるような、強力な開催の推進者がいなかったこと。もう一つは、加賀本草学の中心にいた前田綱紀の時代（在位1642～1722）が、全国的に見た博物的本草学の隆盛の時代よりも早く、加賀本草学隆盛と博物的な本草学を承けた物産会隆盛が時代的にかみ合わなかったこと。そして最後に、高度な知識や技術があってもそれを秘伝として伝授することに終始し⁹⁵、博物的な本草学支持層の広がりが見られなかったことである。

無論、加賀には小野蘭山の教えを受け山本讀書室とも関係の深い村松標左衛門や、弄石を通して木内石亭と親交があった津田随分齋、堀麦水など金沢の文人がいたが、彼らが加賀藩内で本草学の知識を共有し、自分たちの手で物産会などを開く組織的な動きには至らなかったようである。

このように、地方での物産会などの開催には強力な推進者、支持層、地域性、時代性などのタイミングの揃っていることが必要であったと考えられる。

1.2 目録の刊行

目録の作成も、物産会などの開催で見られた大きな特徴であったと考える。目録は現在も写本の形で多数残されているが、会場の様子を伝える絵図はほとんど残されていない⁹⁶。そのため目録は当時の物産会などの具体的な内容を知る大切な史料となっている。

目録の多くは、ほぼ共通して出展品名（異名を附記する場合もある）、出展者、産地、数量などを記している他、「上・中・下品」などの評語が書き加えられている場合もあるが、ほとんどの場合出展品には解説がない。また、記載は出展物による分類ではなく、出展者別がほとんどである。この時代には、品物は人に付くものとして認識され、出展

品自体の種別分類ではなく、誰が何を出品したかという記録を重視していたためと考える。それは恐らく、品物の名称は、各地の物産会などの目録等を通して共通名称が定められていったとしても、品物の種別分類の大系を標準化する意識に欠けていたためではなかったかと思われる。この時代の本草学は、西洋植物学での種の分類などの影響を受けていたとは言え、天産物全体を体系的に分類して記載する意識と、そのような目録の必然性については、まだ希薄だったと考えられる。

目録作成の時期については、開催に併せて刊行し、当日それを見ながら鑑定したのか、それとも当日鑑定した結果を後日にまとめて目録としたのか、どちらの例も見られ、何れが通例なのか速断できない。だから目録の序文、跋文などに記された日付がそのまま目録の刊行日なのか、会の開催日だったのか即断するのもまた難しい。

会に先立って刊行した例には、尾張の本草学結社菅百社が天保6年(1835)3月に開いた本草会の目録があり、小引には同年2月の日付で「今先録其所具若干種以上粹、且運送於各地同好以告之目録刻成之、後諸家陸續具致者更俟続刻」とある。

また閉会後の刊行では、大坂で戸田斎らが宝暦10年(1760)4月15日に会を催した際、その記録『文会録』を5月に刊行。宝暦11年(1761)4月に京都で岩田養慶が催した会の記録『楮鞭余録』は9月になって刊行されたなどの例がある。

評語については、『文会録』には「上品」の評はあるが、「中・下品」の評語がなく、『楮鞭余録』では「上・中・下品」三種の評語が記されている。何れも会期中に行った品評の結果を記したものと考えられる。

また、会期後の刊行であるが、宝暦13年(1763)7月に平賀源内が刊行した『物類品隋』は、その前年までに田村藍水らと開いた過去5回の物産会などの出品品から重要と思われる品を選んだもので、他の目録とは違い出品物を種類ごとに分類して解説し、絵図も多くを載せている特徴的な内容である。

『富山藩薬品会目録』では「引」に嘉永6年6月25日の日付があり、これまでこの日付を以て開催の期日と見なされてきた。しかし同目録が『文会録』、『楮鞭余録』同様に印刷し刊行されたものであること、内容に「上品」との評語記載があることから、会の中で品評を行ったと考えられるので、必ずしもそれが開催日時とは一致しない可能性も否定できない。

1.3 利保との関係

筆者は富山藩薬品会に際して前田利保は、開催を主導する役と、支持層を育成する役を兼ねるような立場にあったと見る。利保の藩内での本草学に関わる様々な動きを改め

て整理すると、「富山藩薬品会」とは嘉永6年に開かれた一回のみを指し、他に関連する動きがあったのではないか、という疑問が生ずる。史料の中には、単に「薬品会」と呼ばれた催しと、「富山藩薬品会」と呼ぶ催し、その他に藩の産物方が催した国産陶器、織物などの展示会開催が混同したまま引用されてきた可能性が考えられるからである。

利保と本草学の関わり記した基本史料は、利保の随筆『龍澤公御随筆』の他には『故富山侍従兼長門守前田利保行略』（以下「行略」と略記）、『前田氏家乗』（以下、「家乗」と略記）などがある。この二冊はいずれも明治になってから書かれたもので、細部に傍証をとれない点を含むが、以下、利保と本草学に関する動きを史料から抄出し整理する。

■家臣や薬種商人に本草学の知識を普及させた

城内の納涼所という場所で、利保は家臣、藩医に対して定期的に蘭学、本草学を教えていた。また薬舗から薬種の鑑定依頼があればそれを行った。

毎月日ヲ刻シ 近臣ニ蘭学ヲ教授シ 城中ノ一亭納涼所ト名ケル所ニ臨ミ医師
ヲ聚メ 本草ヲ講シテ之ヲ聴カシム 〔行略〕

毎月日ヲ定メテ 臨場ス薬舗等ヨリ薬種ノ鑑定ヲ請フ者アラハ 之ヲ許ス
〔行略〕

結果として、この活動を通じた本草学に関する知識の啓発が、富山藩薬品会開催のための支持層の育成に繋がっていったと見る。

■東田地方に藩の薬草園を設置し、そこに大小軒と称する建物を建てた

■大小軒では売薬商人が集めた品物、陶器、織物などを並べ、藩士や庶民に見ることを許した

「大小軒」がどのような施設であったのか、その存在についての具体的記録はない。

城東東田地方村ニ数千歩ノ地ヲ開キ 薬草園トナシ 中央ニ大小軒ト称スル樓
屋ヲ建設シ 中ニ鬻薬者齋ラセシ物品 并ニ陶器織物等を臚列シ 士民ニ縦覧
ヲ許ス 頗ル今ノ博覧会ニ似タリ 〔行略〕

■藩に産物方を設置した

「産物方」の実態、施策についても全体像が掴みにくい。

又漸次工業ヲ張ランコトヲ欲シ治下丸山ニ場ヲ設ケ 陶器ヲ造ラシメ 尋イテ
藩臣藤沢兵衛ヲ山城西陣ニ遣ハシ 織物ヲ伝習シ 還ルニ及ンテ工人ヲ率ヒテ
来ラシム 『行略』

『八尾町史』によれば、利保は藩政の刷新と国産を興す為に富山城内に産物方を新設し、具体的施策として陶器、塗物、機業、薬草の制作栽培をすることを定めた。

陶器製造については、婦負郡丸山村の甚左衛門に命じて同村内に工場を設けた。次いで針原村、新川郡東田地方にも陶器工場を設けた。また京都西陣から織工を雇い、錦類を織らせ、能装束にする精巧、絢爛たる織物を多く作らせた、としている。

ここにある新川郡東田地方での陶器工場設置が、同地に開設した薬草園に併せたものであり、更にその中の大小軒で陶器・織物なども併せて縦覧させたとするならば、「大小軒」は物産展示館の意味に解釈できる。陶器、織物に限らず、薬草園で栽培した薬草の展示も考えられなくはない。

また一方で、『大日本教育史資料 卷十』では「産物方」について、「猶又民庶ノ開知ヲ要シ博物場ヲ設ケ称シテ産物方ト曰フ」とも記している。この「博物場」と「産物方」との関係を知る史料はこの他に見られず、実態が掴めないが、『大日本教育史資料』のこの記述が、利保の教育への取り組み方の中で書かれていることから推定できるのは、大小軒は場合によって、恐らく藩校廣徳館と連動して子弟の教育のために博物場として使用され、それ以外には藩が開発に関与した産物を公開するのに使われたものではなかったかということである。

産物方の組織と施設の関係については今後の研究を俟ちたい。

■薬品会の開催

嘉永六年、城東の閑地東田地方に一区を画し、藩士及び医師蔵する所の薬草薬石、其他珍品奇物を提出せしめ、且売薬商に命じて、他邦の物産を蒐集し、以て陳列し、衆庶の知識を開達せしむ、是を薬品会と称せらる、即ち今の博物館の如きなり 『家乗』

ここでいう「薬品会」が「富山藩薬品会」を指すか否かという問題も残されているが、

「東田地方に一区を画し」た会場が、同地に設置されていた藩の薬草園内と仮定すれば、大小軒がそれに利用された可能性が高い。だが一方で、富山藩薬品会の会場については、梅沢町の大法寺とする記述¹¹⁾もあり、断定はできない。

次の史料からは、嘉永六年に薬品会が開かれ、それが「富山藩薬品会」を指すことは確認できるが、会場についての記述はない。

[嘉永六年の薬品会] 嘉永六年、前田利保君の主催により、薬品会なるものを富山に開かる。集むるところの物約二百点、其品目は「富山藩薬品会目録」に記さる。同目録の原本は利保君の手に成り、布目、鳥の子紙、木版なり、品目の下に記せる姓名は出品人と知るべし、

『越中史料』所収 [嘉永六年の薬品会]¹²⁾

『八尾町史』の記述、及び上記二つの史料から考えると「嘉永六年の薬品会」は「富山藩薬品会」のことと考えられるが、産物方の所管で大小軒を会場にして、薬種商が余所で仕入れた薬種、陶器、織物などの国産品を展示する機会も、これとは別に持たれていたということになる。

■日新会、物品分種会などのサロンを開いていた。

「日新会」では、利保を中心に同好の近習が参加し、持ち寄った草木に優劣を付け、賞を下賜するという活動を行っていた。参加者の中には、富山藩薬品の出展者も含まれる。嘉永5年正月に行った会の品評表が現存するが、その中では「絶品」「上品」「異品」「凡品」「雑品」「奇品」（順不同）と6種の評語が用いられており、相当に詳細な品評のなされたことが想像できる。また、同様の趣旨で「物品分種会」という会も行われた¹³⁾。

この2つの会の内容、参加者にどのような違いがあったのか不明な点が多いが、これらの活動が、利保の関連した本草関係の活動の中で最も博物的で、また支持層の育成に直結するものであったと思われる。

これらの点を含めて、利保の関連した本草関係の諸活動は概ね、

①産物方の設置、②薬草園の設置、③藩士、藩医への講義、売薬商からの薬種鑑定依頼への回答、④日新会など近習との本草学サロンの形成、⑤自らの植物採集活動、⑥本草書の編纂などにまとめることができるだろう。

そこからは、本草学の知識を藩の殖産興業のため、様々な施策の中に利用しているが、これは後述する彼の本草学に対する基本的な考え方と一致する。そこからは実学に立脚

しながらも園芸や動物、昆虫など自然への興味を失わず、広げていった姿が見てとれる。

1.4 富山藩内での「富山藩薬品会」の位置づけ

富山藩薬品会での出展者は、ほとんどが藩医と藩士であったが、そのような限られた中に支持層が形成されていたのは、同好者の育成が利保を中心に藩の中心部で士分の内で担われていたため、これは開催の中心には前田利保の存在があったことの証左だろう。つまり、開催の主唱と、それに先立つ支持層の育成の両方に関わることが可能であった利保の存在があったからこそ富山藩薬品会は開催できたのである。

富山での本草学といえば、生薬の見分けなど、売薬に直接結びつく実学であって、趣味の世界へ広がるものではなかった。だから却って富山はこのような博物的な内容を受け入れる土壌に乏しかった。多くの藩士や庶民には、売薬と離れた博物的な本草などには必要性を感じることは希であったろう。実利的な面を重視する風土的な気質からすれば、本草学はあくまで生薬に直結する薬学であって、趣味的なものをそれに含んで考えることが憚られたようにも思われる。ただ、江戸本草学の雰囲気を知る利保とその側近がサロンの中で、その世界を楽しんだのであろう。

また、諸史料には「薬種商に命じて諸国の珍奇なものを集めさせた」という記述も含まれているが、これは当時の博物展示を考える上で興味深いことである。但し、富山藩薬品会への出展者38名の中に、明らかな薬種商（町人）と思われる名前は見あたらないので、薬種商が直接出展する形ではなく、利保自身か、近習の命で収集させたものとも考えられる。出展品には確かに越中以外の産品は多いが、具体的な出展品については次章で詳述する。

1.5 利保にとっての富山藩薬品会

本草学に関する江戸での利保の行動に、江戸で物産会に触れた記述がある。

栗本瑞見幕府産物会頭タリ 又利保ト相交ハリ以テ益友トナセリトイフ

『行略』

此頃栗本瑞見公官の物産会頭たり。常に訪れて研究す 『澗沢公御随筆』

これは、栗本瑞見¹⁴⁾が鑑定を務めた江戸医学館薬品会を訪れていたことと思われる。そこでの見聞はまた富山藩薬品会にイメージされたことだろう。そして、何よりも江戸での楮鞭会の活動が、利保がめざした富山での博物的本草学の展開のモチーフであったこ

とは間違いないであろう。楮鞭会の活動は利保の帰国によって消滅していったが、「富山藩薬品会」には、逆に国元に帰ってから楮鞭会に託した思いを改めて実行に移す機会にしたかったという意図が推定される。『富山藩薬品会目録』の引¹³⁾（以下、「引」という）の中に書かれた薬品会開催の趣旨と、利保が天保7（1836）年9月25日に起草した「楮鞭会業軌則」（以下、「軌則」という）の中に謳った楮鞭会の基本姿勢には似通った考え方が見られるからである。

先ず、「軌則」¹⁴⁾では「以て民用に利する」旨が三回繰り返して述べられているのに続いて「因以利極其於裨補。豈亦鈔淺云乎。」とする。この言葉は、自分たちの活動が民に利する意味合いの大切さを宣言していると解釈できる。一方、「引」でも同様に「非特資每識実裨益生民。豈淺々云乎。」と述べている部分がある、それらには共通して本草学は元來が民用厚生¹⁵⁾の為の実学で、様々な品物について検討をするのは、その真贋を正し、能毒を明らかにして民用に利するためのものとする考え方があるようである。

楮鞭会へ持ち込まれた品物や富山藩薬品会の出展物は、必ずしも人々の生活に結び付く物ばかりではなかったが、対象を生薬だけではなく天産物全体に拡大しても本草学の本質は同じという考え方があったと思われる。要はそれを薬として役立つのか、また生活全般のどこかに役立つ可能性¹⁶⁾を考えるか、といった違いと見ていたのではないかと考えられる。つまりは、園芸など趣味の域で生活を豊かにできる物であれば、それもまた民に利するとする考え方である。

次に、出展数については両者ともに「数が多ければよい」との考え方をしていないことが挙げられる。

所致品物例雖如此数少為善、戒勿濫多	「軌則」
抑出品之夥子弟或病難	「引」

物産会などは時代が下ると、特に江戸では出展数を競い見せ物に走るようになる。これはその傾向への戒めと、物産会などの本来の姿を標榜する宣言とも見てとれよう。

以上に加えて、富山藩薬品会開催の目的には「子弟らに実物を見せ、物の真偽をはつきりさせる目を持たせる」という実証主義的な視点からの教育的意義があった。

今也 同好於会 各出所藏品論討匡謬 使子弟輩目擊的識其名狀 「引」

これらの点から、富山藩薬品会開催の意味を次の三点にまとめて考えてみた。

一つは、利保の趣味を反映し、藩内で形成した本草学サロンの延長線上にある品評会・発表会。また、藩内で生産した陶器、織物、薬種などを陳列する藩産物方の国産振興政策の成果と連動する中で、薬種商との関係を深め、各地の産物とその情報を収集させた成果の公開の場。そして、それまで行った藩医や藩士への本草・蘭学などの講義の一端を具体物で確認する実習の意味である。

いきなり富山に格鞭会と同じ意識を持ち込んでも、レベルやギャップがあり周りが受け入れないことは利保にはわかっていたことであろう。大切なのは、会の開催そのものではなく、それに至るまでの知識の伝授などの「過程」にあったと見る。

2 出展品から見た特徴

2.1 出展数

目録に記載された出展品は211点だが、同種類の品物を別々に出展している場合や、同類の品物を別名で出展するような重複例も見られるので実数はそれより少ない。ただ、複数の人が同種の品物を出展している場合でも、それが全く同じ物ではなく、亜種であったり、産地、色、模様などの微妙な違いを意識したりして出展したと考えられる場合がある。そのような出展の仕方は他の物産会などでも珍しいことではなく、その方面に詳しい者が、その微妙な違いに評価を加えて鑑定していたと考えられる。

2.2 出展品の分類

出展品のほとんどは天産物で、その内生薬は62点。薬品会と言う名称はこの種の会の別称であって、内容は嘉永6年という時点で、相当に博物的であったことがはっきりする。

出展内容をもその属性で分類すると図1のようになる。()内は出展数。目録記載の出展物リストと個別の分類については付表1を、また生薬と非生薬の割合については付表2を参照されたい。

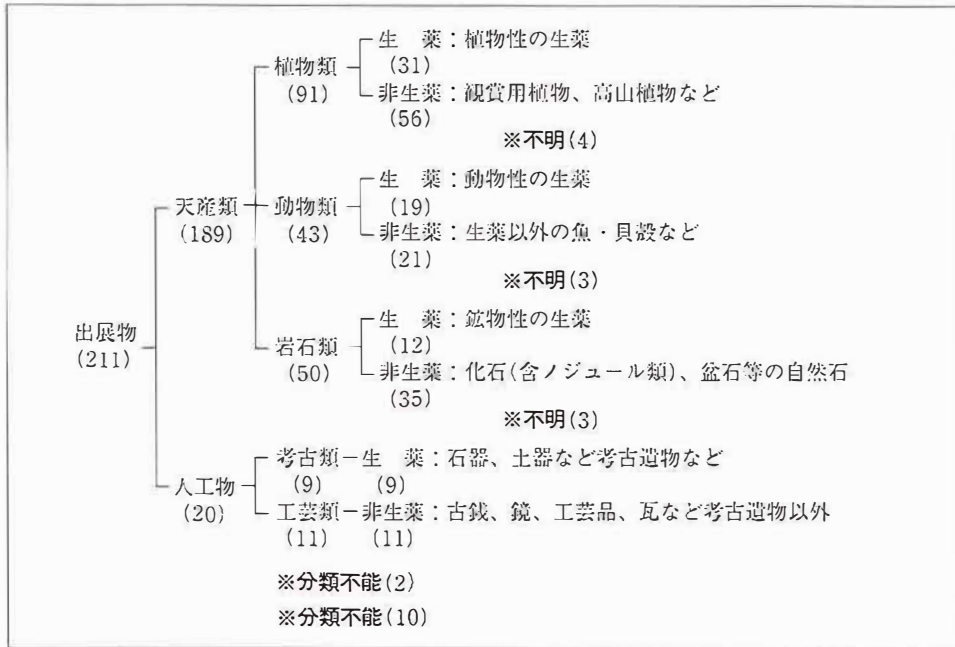


図1 出展品の属性による分類

2.3 出展品の特徴

出展品を様々な視点で分類することで、富山藩薬品会の出展構成と特徴を考えてみたい。

(1) 「上品」の記載があるもの

- ・荔枝
- ・鷓鴣 ホウテン¹¹⁾
- ・鷓鴣雄黄
- ・神代石/二品
- ・越中/密葉黄莖
- ・降神香¹⁸⁾
- ・虎骨
- ・古渡/幾那
- ・朝鮮大人参
- ・スランカスラン¹⁹⁾
- ・含生草²⁰⁾
- ・綿茄

「上品」の記載は、会場で何らかの品評が行われたことを示すもので、当時の物産会などで行った、出展物を「上・中・下品」等に品評する一般的な形を踏襲したものと考えられる。しかし、『目録』に「上品」と記された物がある一方でそれ以外の評語は記されていない。同種の例は他にも見られるとはいえ日新会での品評表が6種の評語によることを考えると、富山藩薬品会の席上で全ての出展品に品評を行ったのか、また、その基準をどこに置いていたのか疑問点が残る。ただ、出展物の中で「上品」と評された物の多くが他国・外国産であったことから、出展者がそれなりに収集・出展の際に吟味した、いわゆる自慢の逸品だったと見られる。

(2) 古銭類の多さ

・長生保命古銭 ・十二支大銭 ・富士銭 ・古銭 ・古銭 二枚 ・古銭 一枚

全出展数211点に対して古銭が7点、出展者6人というのは多い方だと思われる。その遠因には、富山藩では二代藩主前田正甫と、そのコレクションを引き継いで増補した前田利保が全国に知られた古銭の収集家だったことが挙げられる。

嘉永3年(1850)には『泉貨逸品』、嘉永5年(1852)には『逸品拾遺』なる古銭図鑑が富山で刊行され、その序文で当時の富山藩では古銭収集が盛んで、収集の同士、同好者の存在に触れられている²¹⁾。愛好者の層の厚さが出展数に反映したと見るのが自然であろう。

利保は古銭に関しても真偽の鑑別の目を持ち、時々古銭会を開いたという²²⁾。藩主の趣味は当然藩内にも影響し、藩士やその周辺では伝統的に古銭を集めている者がかかなりいたという風土的な影響があったとすれば、その出展の多さは富山で開かれた薬品会を特徴付けるものではないかと考える。出展物の中で名称が記されて「長生保命古銭」「十二支大銭」「富士銭」いずれも普通の通貨ではない絵銭²³⁾で、どちらかと言えば女人好みの収集品と見られる。

(3) 重複する出展例「陽石」の類

・神通川産/陽石 ・陽石二品 常願寺川産 山田川産 ・駿州/陽石

陽石の名称が指す品物には二種が考えられる。まず透閃石、透緑閃石、緑陽起石などで、「陽起石」ともいい、生薬として陰萎などに用いられたものである。また、盆石、自然石の形を見立てて付けた銘と考えられる。例えば『雲根志』には「陽石」の名で「色黒ク白キ筋アリ」と紹介されている男根型の石が載る。

目録記載の名称からはそのいずれか判然としない。ただ、これらの「陽石」はいずれも産地が明記されていることから、異なる地方で産した同種の品を、その違いを品評するために陳列したものと考えられる。

(4) 同類の異種を選んだ出展例

クチナシの変種と思われる、朝鮮梔子、千葉梔子、圓葉山梔子の三種が出展されている。「朝鮮-」に当たる種は未詳。「千葉-」については『袖珍鑑』²⁴⁾には梔子の一種として記載がある。また『本草図譜』にはクチナシの項に千葉梔子の記載はあるが、絵図はない。「圓葉-」はマルバクチナシであろう。

またイチジクの変種の例もあり、細葉天仙果、矮生無花果、南京無花果が出展されて

いる。「天仙果」はイヌビワの異称。『袖珍鑑』では天仙果を「朝鮮イチジク」と当てるが、「細葉-」「矮生-」に当たる種類については不明。

目録中には[矮生]の言葉がよく用いられるが、これは盆栽のように木を矮生化したものの意か、或いは一般種、大型種に対して用いられたものと考えられる。目録中では、背の低い高山植物にこの言葉が用いられている場合が多いようである。また「朝鮮-」「南京-」の名称は、在来種に対して外来種に冠せられることが多い。ここでは江戸時代に日本に入った西洋種のイチジクを指していたのではないかと考える。

(5) 産地による特徴

① 添書から越中産と確認できるもの

- ・ 越中庵谷九牧山²⁵⁾ 鍾乳 花紋石
- ・ 神通川産/陽石
- ・ 神通川産/更紗石
- ・ 陽石/二品 常願寺川産 山田川産
- ・ 船ノ倉貝山産/貝孕石
- ・ 越中氷見産/團子石²⁶⁾

他の地域で開かれた物産会などに展された越中産岩石類には、福光産の玉、瑪瑙や田川村産の笠石、木葉石、五箇山の煙硝などがあるが、地元の越中で開かれた富山藩薬品会ではそれらの展覧が見られないのは疑問である。氷見産の団子石以外に越中西部、砺波郡産の出展物の記載がないのは、当時加賀藩領であったこれらの地域との、本草関係の繋がり希薄さを窺わせる特徴とも見られる。

② 越中立山及びその山域で採集したと推定される高山植物類

- ・ 越中/密葉黄莖²⁷⁾
- ・ 越中/一葉狼牙²⁸⁾
- ・ 越中/梅花菊²⁹⁾
- ・ 越中チゴノマイ³⁰⁾
- ・ 立山麦³¹⁾
- ・ 紅花/鼠麴³²⁾
- ・ 三葉黄蓮³³⁾
- ・ ヒランジ
- ・ 銀梅草³⁴⁾
- ・ ツガサクラ
- ・ ツルコケモウ
- ・ アルセム³⁵⁾
- ・ キタンホ³⁶⁾
- ・ 岩髭
- ・ 白辛³⁷⁾
- ・ ツタヤクシユ
- ・ 草津升麻³⁸⁾
- ・ 矮生紫苑³⁹⁾
- ・ 白花龍膽⁴⁰⁾
- ・ 白山瞿麦⁴¹⁾
- ・ 綿草⁴²⁾
- ・ 一葉萎陵菜⁴³⁾
- ・ ア子モ子⁴⁴⁾
- ・ 苔龍膽
- ・ 細葉鹿蹄草⁴⁵⁾
- ・ 心紅鶴腿児⁴⁶⁾
- ・ 金梅草⁴⁷⁾

「越中-」の記載から、上記植物の産地には必ずしも立山だけではなく、白木峰や医王山などの山域も含まれるかも知れないが、数の点では、三方を山に囲まれた越中の風土をよく反映している結果である。立山に限らず、越中内のいろんな地域で植物を採取するのは、日新会、物品分種会などの品評会が度々行われてきた経緯も影響すると考えられる。

幕末の頃には、植物採集を目的に山へ登る者も出始めたようだが、その中には必ずしも生薬ではなく、純粋な観賞用植物の採集もあった。時代背景には、海外から花を輸入

したり、高山植物などを珍花として観賞用に求めるようになっていった園芸ブームがあって、江戸や尾張の植木屋が珍しい草木探しの為に白山・立山などへ登っていたり⁴⁸⁾、京都の物産会でも立山の高山植物が出展されていた。

当然、そのような時代に、越中では比較的容易に高山植物を、しかも生花で多数出展できる環境であった。他の物産会などでは、一時にこれほど多種の高山植物を扱ったものは見られないことからしても、これが立山の存在を地の利とした越中で催された薬品会の特徴と見てよいであろう。

③ 他国産の出展物

●畿内

- ・京 都：西寺古瓦⁴⁹⁾
- ・河 内：河内生駒山/岩壺⁵⁰⁾

●東海道

- ・常 陸：常陸霞浦産/真珠 日形/三匁五分
- ・駿 河：駿州/陽石
- ・伊 勢：勢州/真珠 二品/一箇日方五分・一箇二分五厘

●中山道

- ・下 野：日光産/扶桑木
- ・信 濃：信州小泉/魚紋石
- ・美 濃：美濃産石、美濃産/大孔石 清朝人名/天台石
- ・飛 騨：飛州/雷斧

●北陸道

- ・能 登：能州産/螢火石
- ・若 狭：若州/孔雀石⁵¹⁾

●山陽道

- ・周 防：岩国錦帯橋産/七福神石⁵²⁾

●山陰道

- ・但 馬：但州産石
- ・丹 波：丹波櫻石⁵³⁾

●南海道

- ・紀 伊：紀州フルヤ谷産/労山石⁵⁴⁾
- ・淡 路：絵島産石⁵⁵⁾

・土佐：土佐産／月日貝

●西海道

・肥前：不知火石

・肥後：肥後産／サラ石⁵⁶⁾

この他にも「拂子貝」、「茗荷貝」、「鱈魚⁵⁷⁾」、「榎藤子ノ類⁵⁸⁾」、「壁虎魚⁵⁹⁾」「琉球貝子」などには産地の記述はないが、越中で産しないので他国産と考えられる。

多くは岩石・考古遺物類で、貝殻なども見られる。この分野には弄石家と呼ばれた珍石の収集家が全国におり、彼ら同士の情報も交換も頻繁に行われていたので、富山のよ
うな地方都市にも、そのような趣味を持つ同好者は存在していたに違いない。

また薬種商に命じて各地の珍品を集めさせたとする記述では

治下ニ薬商ノ四方ニ之ク者多ケレハ 此ノ輩ニ命シ毎歳一回其ノ土ノ産物
ヲ齎チ帰ラシメ 藩臣并ニ医師ヲ貯蔵スル所ノ薬草薬石其ノ他珍品奇物
ヲ出サシメ
『行略』

とある。これに基づく、その成果はこれらの出展物に現れていると思うが、これらの物の中には薬種と言えるものがほとんど見あたらない点もまた特徴であろう。薬種商がどれだけ博物的な知識や興味を持ってその任を承けていたのか分からないが、珍しい薬種の調達を命じたのではなく、いわば本務の他に博物的に関心のある品物を探させたと考えられたようである。収集品の選定も薬種商に任せられたのか、予め指定した物を探させたのかという具体的な点もまた不明だが、おそらく背景には、各地を廻った数多くの売薬商人たちが先々で入手した品物や情報があったと考えるのが自然であろう。

富山藩は、早くから富山売薬の原料薬種の吟味、仲買人の統制を行っていたが、売薬商人や薬種取引を統制する藩の反魂丹役所が、弘化元年（1844）には産物方の支配下に置かれたこと、薬種の流通統制のため嘉永3年（1850）には薬種会所を設置するなどの動き⁶⁰⁾に照らしてみれば「各地の珍品」収集の命を、この辺りから指示を出すことは可能であったろう。

④ 海外産と考えられる物

a 生薬

- | | | | | |
|-----|-----------------------|------|------|--------|
| ・荔枝 | ・古渡／鮮苔 ⁶¹⁾ | ・臘納臍 | ・虎骨 | ・古渡／幾那 |
| ・蛤蚧 | ・一角 | ・菌桂 | ・木鼈子 | ・古渡／琥珀 |

・箆菱 ・蛮国/巴旦杏核 ・犀皮 ・唐木通 径一寸 ・薊醬

b 非生薬

・鸚鵡 ホウテン ・孔雀雄一羽 ・長生保命/古銭 ・蝦夷虫ノ巢⁶²⁾ ・瑠璃

「古渡」、「蛮国」などの記載から外国産と分かるもの、またはその品物が国内に産しない種類の物などで、全体の約一割に当たる。この中で多くが生薬なのは、大坂などの薬種商を通して海外産の薬種を買入れたものと考えられる。しかし多くは高貴薬であろうが、富山産薬で一般的に使用される薬種ではない。

具体的な入手経路が不明だが、このような品物が当時の越中にもたらされ、展示する対象となっていたと言うことに、本来的な薬品会の片鱗が感じられる。

おわりに

富山藩薬品会が幕末の越中で開催されたことには大きな意味があったと考える。

それは、会の実態が当時の越中本草学の水準や広がり的一端を示すものであり、開催に至るまでの、特に前田利保と藩の政策に関係した人や物、情報の流れは、近世の地方都市における学芸活動展開の、興味深い事例となるからである。

加えて、目録や人を介した諸情報の交流は全国的なものではあったが、実際に開催された物産会などの実態には、その地方の風土的な要素、言い換えれば地域の独自性があったことも指摘しなければならない。情報の繋がりがあれば全国どこでも同じような展開があるという訳ではなかった。そこには、地域的な博物的本草学を受け入れる層の厚さ、裾野の広さであったり、「物」に対するアクセスの利便性であったりする様々な要素の介在していたことがわかる。例えば熊野、木曾・伊吹山そして立山などへは享保以降、度々採薬の足が向けられ、その成果は和歌山、名古屋、富山などその膝元で開かれた物産会の出展物に反映していると考えられる。

近世の博物的本草学の展開を、自然を対象とした好奇心の具体的な表現と考えた時、近世地方都市での物産会などの展開事例の整理は、物を通した情報の流れと、その地域の自然や風土を通して展開した地方での学芸活動の内容や、それに携わった者の実態を知る上で重要なことと考える。

そのためには、多くの地方都市での物産会などの開催例を挙げ、目録などによりその内容を把握することが必要となる。各地での物産会などの開催例についてご教示をいただけたら幸いである。

註

- 1) 『富山県教育史』上、『富山県史』通史編Ⅳ 近世下、『富山県薬業史』通史編など。
- 2) 同特別企画展「立山に奇草を求めて－富山藩薬品会を通して－」展示図録27～44頁「富山藩薬品会目録解説」参照。
- 3) 開催の場所、会主、年代については、磯野直秀氏の「薬品会・物産会年表（増訂版）」（『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学No.29』2001）のデータを利用させていただき、上野益三『年表日本博物学史』（八坂書房）から一部を補った。
- 4) 矢部一郎『江戸の本草』（サイエンス社 1984）199頁参照。
- 5) 『新修 名古屋市史』第四巻「第八章 庶民文化の発達と学芸 3 本草学から博物学へ」参照。
- 6) 伊勢では天保3年(1832)3月5日、8月25日に西村広休が、また長崎では弘化1年(1844)に野田青霞が物産会を開いている。西村広休、野田青霞はともに京都で山本亡羊に本草学を学んでおり、開催はその影響が大きかったと見てよいだろう。
- 7) 熊本では宝暦8年(1758)、宝暦9年(1759)、宝暦12年(1862)、明和1年(1764)に開催の記録がある。時期的に早い開催で、しかも出展数は3500点にも及ぶ大規模なものであった。『熊府薬物会目録』（武田科学振興財団杏雨書屋蔵 [乾1489]）が残る。同目録には立山関連の品物出展の記載が二箇所ある。浪華 木邨吉右衛門が「一、靈櫃 越中立山産 和名ゼンジャウ松」を出展。別の箇所では「一、靈櫃 立山産 重出／木邨按ニ靈ノ字考フル所ナシ 何書ニ出ルヤ 恐ハ是玉櫃ナラン 靈櫃トハ名称ナルカ」とある。早い時期での、他地域との立山採集品の交流例として注目される。和歌山では文化12年(1815)、天保2年(1831)、天保9年(1838)、安政6年(1859)の4回、医学館物産会が開かれた。
福井では、『日本教育史資料 卷四』によれば、医学所済世館では、文政2年(1819)、天保3年(1832)、天保13年(1842)に薬品会が開かれ、それ以降毎年または数年間において明治維新まで開かれたという。目録が作られたようだが現存せず、その規模、展示内容については不詳。
- 8) 1733年～1815年。熊本藩医。侍医。父村井朴見は宝暦6年に藩主細川重賢の命を受けて熊本藩の医学学校再春館を創立。椿寿はその父を助けて医学館を興した。再春館の助教を固辞して京都へ出るが後に帰郷。
- 9) 三浦孝次『加賀の秘薬』（石川県薬剤師会 昭和42）206頁参照。

- 10) 『尾張名所図会』(岡田文圃、野口梅居撰 天保15年刊) 卷之二に「尾張藩薬品会の図」がある以外は知られていない。
- 11) 大法寺での開催とする記述の初出は『富山県史』通史編Ⅳ近世下688頁である。『富山県薬業史』など、この内容を引用している文献は少なくないが、その根拠となった史料が示されていない点、今後に検証の余地を残している。
- 12) 『越中史料』に引かれた[嘉永六年の薬品会]の史料諸元は不明。
- 13) 兼子 心「草木品評表について」(富山市郷土博物館編『お殿様の博物図鑑展』図録 1998) 41頁参照。磯野直秀「日本博物学史覚え書 X」(『慶應義塾大学日吉紀要自然科学No.29』2001) 37、38頁参照。
- 14) (1756~1834)。田村藍水の次男で、幕府医官栗本昌友の養子になる。寛政6年から幕府の医学館で本草学を講義し、併せて薬品の鑑定を行った。
- 15) この「引」は、利保の侍医であった野中丹室の名で書かれているが、利保の薬品会への意向が反映されていたと見られている。
- 16) 福井久蔵『諸大名の學術と文藝の研究』(厚生閣 昭和十二) 381・381頁所載の資料による。
- 17) インドネシア産の陸鳥サイチョウのこと。その喙と頭蓋骨が江戸時代にハウデン(鳳頂または鶴頂と書いた)の名で装飾用に輸入、珍重された。
- 18) 降真香のこと。ミカン科カラボクの木部で、生薬にする。
- 19) スランガステイン、蛇石、蛇頂石ともいう。腫物や傷口に当てて膿を吸い出すのに用いた。もとは舶来品で『物類品鑑』には「碁石ノゴトキモノ 其価百金ニ至ル」とあるが、平賀源内はオランダ人からそれを見せられ、翌日には竜骨(古生物の化石)を削って同じ物を作り、オランダ人を驚かせたという。『雲根志』にも「京師の人、龍骨を摺りまろめてこしらう。形状はなはだ似たり、膿性吸うことも同じ」とある。龍骨などで作られるようになってからは薬舗が販売した記録がある。物産会目録で類纂に目にするが、多くはそのような市販品と思われる。また龍骨や獸骨そのものを指して「スランガステン」と言うこともあった。
- 20) アブラナ科の1年草。アラビア、シリア、エジプトの砂漠地域に生育し、乾燥期には全草が球状になり風に運ばれる。別名を「えるこそう」、「ジェリコのバラ」といい、出産の際安産のまじないにも使われた。
- 21) 綿拔豊昭『和漢書覚え書』(桂書房 1992) 第六章「古銭関係の書について」参照。
- 22) 『富山市史』第一巻 853頁参照。
- 23) 実際の通貨ではなく縁起物、信仰などの目的で作られた私鑄銭で、圧勝銭ともいう。

「十二支大銭」、「長生保命銭」はともに中国製の絵銭の一種。「富士銭」は日本製の絵銭で、裏に富士山を描いた物を指し浅間銭とも言われる。

・赤坂一郎『日本の絵銭』（書信館出版 1994）参照

- 24) 安政3年（1856）刊。前田利保の編。『本草綱目』に沿って生薬の漢名を挙げ、その下に対応する和産種名を挙げる。利保が漢産の生薬を何に同定していたかを知ることができる史料である。
- 25) 現在の細入村庵谷字入道付近の俗称。
- 26) 氷見市飯久保の瓢箪石。楕円球形、球形の石が複雑に組み合わさって結合し、瓢箪形を作る。成因には不明な点が多い。この時代、名称は「瓢箪石」と「団子石」が併存する。
- 27) マメ科オウギ、キバナオウギの類。根、葉を生薬にする。『本草通串図』、『奇草小図』に載る「密葉黄耆」の図からはタテヤマイワオウギが推定される。
- 28) この名称からはマメ科のコマツナギ、バラ科ミツモトソウが考えられる他、『袖珍鑑』ではブクサを当てる。また『立山山草譜』（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）に載る「一葉狼牙」の図からは「シナノキンバイ」が、また『楽善堂珍品草木写真』（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）に載る「一葉狼牙」の図からは「ミヤマダイコンソウ」が推定され、特定はできなかった。
- 29) この名称からはユキノシタ科バイカウツギ、また『奇草小図』に載る「ツル梅花菊」の図からは「イワウメ」が推定される。小論では後者に推定した。
- 30) バラ科チングルマ。『本草綱目啓蒙』には、チゴノマイは越中の方言で「オキナ草」のこととある。
- 31) 『奇草小図』に載る「立山麦」の図からはスゲの類と思われ、弥陀ヶ原の「餓鬼田」の中の「ミヤマホタルイ」などが推定される。
- 32) この名称からは、ハハコグサ鼠麴草（きそくそう）、『奇草小図』に載る「立山紅花鼠麴」の図からは「タカネヤハズハハコ」が推定される。
- 33) キンボウゲ科セリ葉黄蓮などが推定される。山本溪愚の『動植物写生図譜』立山採薬の巻には「三葉黄蓮」の図がある。
- 34) ユキノシタ科ギンバイソウ。また『奇草小図』に載る「立山銀梅草」の図からは「ハクサンイチゲ」が推定される。小論では後者に推定した。
- 35) 『奇草小図』に載る「アルセム」、「立山アルセム」の図からは「タカネヨモギ」が推定される。
- 36) 『袖珍鑑』では「キタンボ」を苦菜の類に配列。黄たんぼの意であろう。『本草図

- 譜』にある「きたんぼ」の図を北村四郎氏は「ミヤマタンポポ」に同定する。但し、ミヤマタンポポは立山では見られない。富山県中央植物園の田中政司氏より、同図から立山で見られる同種としては「ミヤマコウゾリナ」が推定できるとのご教示をいただいた。
- 37) 『袖珍鑑』ではツバメオモトに当てる。
- 38) 『奇草小図』に載る「矮生草津升麻」の図からは「モミジカラマツ」が推定される。
- 39) 紫苑で「矮生-」に当たる種は不明。『奇草小図』に載る「矮生紫苑」の図からは「ミヤマヨメナ」が推定される。
- 40) リンドウの一種。『奇草小図』に載る「立山白花竜胆」の図からは「シロバナタテヤマリンドウ」「トウヤクリンドウ」などが推定される。
- 41) 『本草図譜』に載る「木曾白山産の瞿麥」の図を、北村四郎氏はナデシコ科タカネナデシコと同定する。また『奇草小図』に載る「白山ナデシコ」の図からは「シラヒゲソウ」が推定される。小論では後者に推定した。
- 42) 『奇草小図』に載る「綿草」の図からは「ワタスゲ」が推定される。
- 43) 萎蔞菜は生薬のカワラサイコを指すが、「一葉-」にあたる種は未詳。また『奇草小図』に載る「一葉萎蔞菜」図の形状からは「チョウノスケソウ」が推定されるが、花卉数が確認できず、未詳。小論では後者に推定した。
- 44) 『奇草小図』に載る「ア子モ子」の図からは「ヒメイチゲ」が推定される。キンボウゲ科のアネモネは明治以降に日本に渡来したもので、ここでは該当しない。
- 45) イチヤクソウ科鹿蹄草は、生薬に用いる。「細葉-」に当たる種は未詳。『袖珍鑑』では「イワカガミ」を当てる。小論では、後者に推定した。
- 46) 『袖珍鑑』では鷄腿児を「フクレウサウ」を当てる。『奇草小図』に載る「心紅鷄腿児」の図からは「キジムシロ」が推定される。小論では後者に推定した。
- 47) 『奇草小図』に載る「竟命草キンハイサウ」の図からは「シナノキンバイ」が推定される。
- 48) 磯野直秀氏のご教示による。
- 49) 寺院名の入った軒丸瓦。同様の古瓦は古くからコレクターの収集対象となっていた。西寺は現在の京都市南区にあった寺院で奈良時代の創建。鎌倉時代末に衰退し、のち廃寺。
- 50) 太乙禹餘糧。『雲根志』には「円にしてかたく、石中空虚なり。あるいは石中に土砂、小石などあり。和名樽石、岩壺、鈴石などいへり。諸国に産すといへども、大和国生駒山に多し」とある。

- 51) 装飾用や顔料に用いられる鉱石マラカイトを指す他、愛石家の間で球状流紋岩の模様を指して、クジャクが羽を広げた模様に見立てて孔雀石と称された。
- 52) 岩国市の錦川に住む「ニンギョウトビゲラ」の幼虫が川底の小石や砂粒を集めて作った筒巢。岩国では、錦帯橋の人柱になった乙女の生まれ変わりという伝説があり、江戸時代から厄除けのお守りとして「人形石」と称して売られている。
- 53) 薑青石仮晶。断面が桜の花びらのように見えることからこの名がある。京都府亀岡市稗田野の産が知られ、『雲根志』には「丹波國に桜花石といふあり」と紹介されている。
- 54) 和歌山産の自然石で、表面に滝や残雪のような模様があり、盆石にされた。
- 55) 淡路島の景勝地絵島で採れる石で、白くて人物や花鳥などが彫ったように浮き出ており、盆石にされた。
- 56) 阿蘇中岳に見られる皿状の火山弾。京都の山本讀書室物産会でも「阿蘇皿石」は類纂に出展されていた。
- 57) カブトガニ。
- 58) 榎藤子は、生薬のマメ科モダマの実。九州以南、熱帯に分布し、日本の海岸にも漂着することがある。またイスノキの別称で用いることもある。ここでは「猿腹中ヨリ出」とあるので珍品として出展されたものであろう。
- 59) クモガイ。『物類品騭』卷之四に「和名クモカヒ 中山傳信録曰螺殼上生五六爪形如壁虎名壁虎魚」とあるが、通常は突起は7本。
- 60) 『富山県史』通史編IV 近世下 40～41頁参照。
- 61) 生薬にされた哺乳類諸種の胆石、腸内結石の総称。ベゾアル石、ヘイサルバサル(ラ)などとも呼ばれ、動物種によって色や形が違う。当時の物産会などでは類纂に出展されていた。大槻玄沢、宇田川榕庵が『厚生新編』でベゾアルを鮓苔と訳し、牛の鮓苔を牛黄としている。
- 62) とんぼ玉(装飾用のガラス細工の玉の総称)の一種。別名樺太玉、アイヌ玉とも言われた。ガラス製の玉でアイヌが装飾品としたが、北海道、樺太で作られたものではない。浅葱色の物が多く、製作時の気泡の跡が穴となって表面に残ったものを「虫の巣玉」という。装飾用に緒締めなどに使われた。
 - ・松井恒幸「北のガラス」(神奈川県立近代美術館「日本のガラス展」図録 1974)
 - ・大塚和義「ガラス玉の道」(国立民族学博物館「ラッコとガラス玉展」図録 2001)参照。

謝辞

『富山藩薬品会目録』の出展品推定のためのレファレンスに対して、多くの方々からご教示を頂いたことを改めて感謝致します。

田中政司氏からは、絵図からの植物名の推定に当たって、また、磯野直秀氏からは博物学史に関して、それぞれ貴重なご教示を頂きました。お名前を挙げて感謝致します。

付表1 『富山藩薬品会目録』 騎記載の出展物分類表

No.	目録上の名称	甲 項	乙 項	丙 項	No.	目録上の名称	甲 項	乙 項	丙 項
001	荔枝 上品	天産物	植物類	生 菜	051	石膏 1冊多ノ三枚八百目	天産物	岩石類	生 菜
002	鸚鵡 上品ノホウテン	天産物	動物類	非生菜	052	虎骨 上品	天産物	動物類	生 菜
003	越中産管光紋由 鍾乳花紋石	天産物	岩石類	非生菜	053	烏蛇	天産物	動物類	生 菜
004	杜若山	天産物	植物類	生 菜	054	鴉尾牙	天産物	動物類	非生菜
005	木斛	天産物	植物類	生 菜	055	古鏡ノ琥珀 目形ノ二十六銭	天産物	岩石類	生 菜
006	葱冠雄黄 上品	天産物	岩石類	生 菜	056	角真珠 二品 ⁷	天産物	動物類	非生菜
007	石弩	人工物	考古類	非生菜	057	一角	天産物	動物類	生 菜
008	羅漢天仙果	天産物	植物類	非生菜	058	白蛇 ⁸	天産物	動物類	不 明
009	木目カシ	不 明	不 明	不 明	059	鮭苔	天産物	動物類	生 菜
010	キタンホ	天産物	植物類	非生菜	060	木鼈子	天産物	植物類	生 菜
011	ヒランジ	天産物	植物類	非生菜	061	古鏡ノ鏡那 上品	天産物	植物類	生 菜
012	延生無花果	天産物	植物類	非生菜	062	朝鮮樺子	天産物	植物類	非生菜
013	曲玉	人工物	考古類	非生菜	063	竹柏	天産物	動物類	非生菜
014	管石	人工物	考古類	非生菜	064	千葉樺子	天産物	植物類	非生菜
015	霽露銀	人工物	考古類	非生菜	065	白花龍膽	天産物	植物類	非生菜
016	神代石 上品ノ二品	人工物	考古類	非生菜	066	蘭桂	天産物	植物類	生 菜
017	越中ノ密葉黄葉 上品	天産物	植物類	生 菜	067	花 ⁹ ノ鼠麴	天産物	植物類	非生菜
018	岩凝	天産物	植物類	非生菜	068	越中ノ一葉狼牙	天産物	植物類	非生菜
019	白辛	天産物	植物類	生 菜	069	越中ノ梅花菊	天産物	植物類	非生菜
020	萍芒決明	天産物	植物類	生 菜	070	肥前フルヤ谷産 勞山石	天産物	岩石類	非生菜
021	石下夏枯草 飛龍 ¹⁰	天産物	植物類	不 明	071	朝鮮大人參 上品	天産物	植物類	生 菜
022	古鏡ノ鮭苔	天産物	動物類	生 菜	072	朝鮮引放人參	天産物	植物類	生 菜
023	露蜂房	天産物	動物類	生 菜	073	スランカスラン 上品	天産物	植物類	生 菜
024	鯉魚	天産物	動物類	非生菜	074	黄芩花	天産物	植物類	非生菜
025	鱈魚 ¹¹	天産物	動物類	不 明	075	菟花	天産物	植物類	非生菜
026	神代石 彫形	人工物	考古類	非生菜	076	中傘芫花	天産物	植物類	非生菜
027	大曲玉	人工物	考古類	非生菜	077	柘	天産物	植物類	非生菜
028	法師骨 ¹²	天産物	動物類	非生菜	078	櫻桃	天産物	植物類	非生菜
029	拂子骨	天産物	動物類	非生菜	079	黄楸	天産物	植物類	非生菜
030	能州産ノ螢火石	天産物	岩石類	非生菜	080	海馬	天産物	動物類	生 菜
031	雪甌 ¹³	天産物	動物類	不 明	081	吉丁虫	天産物	動物類	非生菜
032	蝦夷虫ノ葉	人工物	工芸類	非生菜	082	踏水ノ石	天産物	動物類	非生菜
033	竹石	天産物	岩石類	非生菜	083	密林ノ真珠	天産物	動物類	生 菜
034	鯛頭石 ¹⁴	天産物	不 明	非生菜	084	石英	天産物	岩石類	生 菜
035	鱈頭石	天産物	不 明	非生菜	085	布袋石 ¹⁵	天産物	不 明	非生菜
036	石州小桑ノ魚紋石	天産物	岩石類	非生菜	086	阜諦石	天産物	岩石類	非生菜
037	富内山陽山ノ岩壺	天産物	岩石類	非生菜	087	丹波櫻石	天産物	岩石類	非生菜
038	長生保命ノ古銭	人工物	工芸類	非生菜	088	鯛ノムコノ源八 ¹⁶	天産物	動物類	非生菜
039	神通山産ノ陽石	天産物	岩石類	不 明	089	十二支大銭	人工物	工芸類	非生菜
040	芝ノ類	天産物	植物類	生 菜	090	富士銭	人工物	工芸類	非生菜
041	箱ノ谷山産 貝孕石	天産物	岩石類	非生菜	091	文蛤石	天産物	岩石類	非生菜
042	珠孕石	天産物	岩石類	非生菜	092	含生草 上品	天産物	植物類	非生菜
043	菊箔石	天産物	動物類	生 菜	093	菊葉 ¹⁷	天産物	植物類	生 菜
044	キジカクレ ¹⁸	天産物	植物類	不 明	094	紅シベ天女花	天産物	植物類	非生菜
045	ヅタヤクシユ	天産物	植物類	生 菜	095	華菱	天産物	植物類	生 菜
046	草津升麻	天産物	植物類	非生菜	096	烏葉	天産物	植物類	生 菜
047	延生紫苑	天産物	植物類	非生菜	097	南京無花果	天産物	植物類	非生菜
048	蛇床	天産物	植物類	生 菜	098	五通丸ノ大孔石 高州人名ノ天台石	天産物	岩石類	非生菜
049	降神香 上品	天産物	植物類	生 菜	099	肥前ノ不知火石	天産物	岩石類	非生菜
050	鰐腸脂	天産物	動物類	生 菜	100	鳥髪 ¹⁹ 高州人名ノ今半雷高島女	天産物	動物類	非生菜

No.	目録上の名称	甲 項	乙 項	丙 項
101	立山麦	天産物	植物類	非生葉
102	岩ヲモダカ	天産物	植物類	非生葉
103	巻柏	天産物	植物類	非生葉
104	細葉子持シダ ¹⁰⁾	天産物	植物類	非生葉
105	獅子葛	天産物	植物類	非生葉
106	スバカケサウ	天産物	植物類	非生葉
107	神代石 二品	人工物	考古類	非生葉
108	陽石 二品 常陸守用産/山田田産	天産物	岩石類	不明
109	人丸石	天産物	岩石類	非生葉
110	石芝ノ類/ボタン石	天産物	動物類	生 葉
111	瑠璃	天産物	岩石類	非生葉
112	貝孕石	天産物	岩石類	非生葉
113	馬腦	天産物	岩石類	非生葉
114	木香 二葉	天産物	植物類	生 葉
115	モンベツ	不明	不明	不明
116	西寺ノ古瓦	人工物	工芸類	非生葉
117	数珠 城山産 ¹¹⁾	人工物	工芸類	非生葉
118	赤石脂	天産物	岩石類	生 葉
119	常陸産曲角/真珠 目形/三粒五分	天産物	動物類	生 葉
120	犀皮	天産物	動物類	生 葉
121	蛇含石	天産物	岩石類	生 葉
122	黒石英	天産物	植物類	非生葉
123	和蘭胡桃	天産物	植物類	非生葉
124	礬石	天産物	岩石類	生 葉
125	馬糞石	天産物	動物類	生 葉
126	蚊母樹実	天産物	植物類	生 葉
127	朝鮮カサユリ	天産物	植物類	非生葉
128	白花スミレ	天産物	植物類	非生葉
129	白山櫻麦	天産物	植物類	非生葉
130	爪石	天産物	岩石類	非生葉
131	越中チゴノマイ	天産物	植物類	非生葉
132	綿草	天産物	植物類	非生葉
133	一葉萎蔞菜	天産物	植物類	非生葉
134	胡黄蓮 ¹²⁾	天産物	植物類	生 葉
135	眞紫桂	天産物	植物類	非生葉
136	圓葉山梔	天産物	植物類	非生葉
137	常州ノ真珠 二品	天産物	動物類	非生葉
138	木瘤 珠子形	天産物	植物類	非生葉
139	神代木	天産物	岩石類	非生葉
140	ア子モ子	天産物	植物類	非生葉
141	苔龍膽	天産物	植物類	非生葉
142	養老菖蒲	天産物	植物類	非生葉
143	細葉鹿蹄草	天産物	植物類	生 葉
144	馬吐石	天産物	動物類	生 葉
145	牛吐石	天産物	動物類	生 葉
146	魚虎 ハリセンハウ	天産物	動物類	非生葉
147	孔雀雄一羽	天産物	動物類	非生葉
148	龍膽	天産物	植物類	生 葉
149	燕尾貫葉 ¹⁵⁾	天産物	植物類	非生葉
150	ケイクワンラン	天産物	植物類	非生葉

No.	目録上の名称	甲 項	乙 項	丙 項
151	唐ノ木通 径一寸	天産物	植物類	生 葉
152	蝙蝠ハコベ	天産物	植物類	非生葉
153	雄黄	天産物	岩石類	生 葉
154	常陸ノ桔梗	天産物	植物類	非生葉
155	タコマクラ	天産物	動物類	非生葉
156	楡藤子ノ類 猿腹中ヨリ出	天産物	植物類	非生葉
157	羚羊角	天産物	動物類	生 葉
158	琉球貝子	天産物	動物類	非生葉
159	茗荷貝	天産物	動物類	非生葉
160	サンシヤウ魚 長一尺二寸	天産物	動物類	非生葉
161	白磁石/冠形石	天産物	岩石類	非生葉
162	唐鏡	人工物	工芸類	非生葉
163	芙蓉産石	天産物	岩石類	非生葉
164	古銭	人工物	工芸類	非生葉
165	神師田産ノ更紗石	天産物	岩石類	非生葉
166	常州ノ陽石	天産物	岩石類	不明
167	常州ノ孔雀石	天産物	岩石類	非生葉
168	常州ノ雷斧	人工物	考古類	非生葉
169	絵島産石	天産物	岩石類	非生葉
170	南柴胡	天産物	植物類	生 葉
171	姫石楠	天産物	植物類	非生葉
172	芍薬葉半葉	天産物	植物類	生 葉
173	磯煎石	天産物	岩石類	非生葉
174	日光産ノ扶桑木	天産物	不明	非生葉
175	古銭 二枚	人工物	工芸類	非生葉
176	但州産石	天産物	岩石類	非生葉
177	三葉黄連	天産物	植物類	生 葉
178	心紅鷄眼児	天産物	植物類	非生葉
179	ツガサクラ	天産物	植物類	非生葉
180	舌石 三圓	天産物	岩石類	非生葉
181	青磁石ノ類 一品	天産物	岩石類	生 葉
182	篠魚 ¹⁶⁾	天産物	動物類	非生葉
183	上陸産ノ月日貝	天産物	動物類	非生葉
184	壁虎魚	天産物	動物類	非生葉
185	寄生根	天産物	植物類	非生葉
186	黒陽石	天産物	岩石類	非生葉
187	朝鮮大人参葉	天産物	植物類	生 葉
188	同ノホウキシノ	天産物	植物類	生 葉
189	綿麻 上品	天産物	植物類	不明
190	金梅草	天産物	植物類	非生葉
191	銀梅草	天産物	植物類	非生葉
192	アルセム	天産物	植物類	非生葉
193	一葉狼牙	天産物	植物類	非生葉
194	ツルコケモ	天産物	植物類	非生葉
195	常陸ノ巴旦杏核	天産物	植物類	生 葉
196	貝子	天産物	動物類	非生葉
197	蠶虫 ¹⁷⁾	天産物	動物類	生 葉
198	猪牙皂莢	天産物	植物類	生 葉
199	蛤蚧	天産物	動物類	生 葉
200	古銭 一枚	人工物	工芸類	非生葉

No.	目録上の名称	甲 項	乙 項	丙 項
201	越中赤見産ノ閉子石	天産物	岩石類	非生薬
202	陰命 ¹⁹⁾	天産物	不 明	非生薬
203	鐘乳石	天産物	岩石類	非生薬
204	岩国藩常産ノ七福神石	天産物	岩石類	非生薬
205	銀錠	天産物	岩石類	非生薬
206	鉛錠	天産物	岩石類	非生薬
207	古鏡	人工物	工芸類	非生薬
208	舍利母石	天産物	岩石類	非生薬
209	燕石 ²⁰⁾ 上品	天産物	岩石類	生 薬
210	孔公婆	天産物	岩石類	生 薬
211	肥後産ノサラ石	天産物	岩石類	非生薬

凡 例

- ・目録記載211品目の名称から出展品を推定した結果を3段階に分類した。
- ・甲項では「天産物」と「人工物」に分類。その際、名称からでは、どちらに該当するか推定できなかった2品については不明とした。
- ・乙項では、天産物についてはその属性の由来を「植物」「動物」「岩石」に、人工物については「考古」「工芸」に分類した。但し、石器など、いわゆる当時の「神代石」については、自然石との区別での中でのどの程度人工物として認識されていたか疑問はあるが、本表ではすべて人工物に分類した。
- ・一つの名称から複数の品物が推定され、しかもその分類も複数にまたがってしまう場合は、不明として、適宜註を付した。
- ・丙項での生薬・非生薬の分類は、『大和本草』『本草綱目啓蒙』等の本草書に薬効が記載されているものでも、一般的に生薬としてではなく、むしろ観賞用にされたと考えられる物については「非生薬」に分類し、適宜註を付した。

付表1註

- 1) 夏枯草はウツボグサ（生薬）を指すが「石下-」に当たる種は未詳。『袖珍鑑』ではジウニヒトエに当てる。目録ではこれのみ葉腊（押花標本）あるので、他に出展された植物は生花であったと考えられる。
- 2) 鰐の類。鰐のペニスが生薬にすることもあったので、ここでは珍獣として全身の標本や生体を出展したのか、生薬として部分を出展したのかは不明。
- 3) 鯨骨の一部と推定される。『和漢三才図会』には鯨の「肉に近き聞き骨を法師骨と名く此も亦漁家油を採る也」とあるが、どの部位を指すのか不明。
- 4) 本草綱目』には「陰山、峨眉山に生ずる虫」とあるが、何を指すのかは不明。
- 5) この名称からは、魚の頭に似た形の石を見立てた名称の他に、①「鯛石」と呼ばれた魚

- の頭にある耳石。②魚の頭のある丁字形の石「魴」。③形が魚に似た、魚類の肩帯骨「魚中魚」などが考えられ、特定はできない。
- 6) ユリ科キジカクシの他、麗髭菜、百部などを指すこともある。『袖珍鑑』では「迎涼草」を当てる。『本草通串證図』に載る「迎涼草」の図からはタチテンモンドウが推定される。
 - 7) 珍奇な角形の真珠。具体的には、アワビから採れることがある特徴的な角形をした真珠を指したと推定される。(松月清郎氏のご教示による。)
 - 8) 岩国のシロヘビ(アオダイショウのアルビノ)のような蛇を金網籠に入れるなどして出展することは可能であったと思われる。また、加越能文庫蔵『御薬種目録』では、カラスヘビ(烏蛇)に対してマムシを白蛇と記載した例が見られる。
 - 9) 鯨の耳石(耳骨)、または七福神の布袋に似た形の自然石などを見立てたものと推定される。
 - 10) マツカサウオ。各地の物産会などでは「鯛鯉源八」の名称でよく出展されているが、その語源については不詳。
 - 11) 櫛で梳いて抜けた女性の髪の毛の意であろう。7尺6寸(約2.3m)はギネスブックに載る長髪記録とほぼ同じ。窪美昌保が『富山藩薬品会目録』を明治31年に書生笹倉松次郎に写させた上、出展物及び出展者について朱筆で添書きを付けた『富山藩薬品会目録 写本』(富山県立図書館蔵)には「昌保按スルニ該長髪ハ画工香雪女史ノ毛髪ナラン歟」と書込みがある。香雪女史は富山の女性画家、水上香雪と考えられる。
 - 12) コモチシダの一種。『本草通串證図』に載る「細薬子持シダ」の図からはイヌワラビあるいはオオカグマの類が推定される。
 - 13) 乾燥した蓮実を繋いで作った数珠。廬山蓮実とあるので「廬山白蓮」の実を使ったものであろう。
 - 14) この名称からは3種が推定された。①ゴマノハグサ科のコオウレン。②『袖珍鑑』では「センフリ」(トウヤクリンドウ)を当てる。③『奇草小図』に載る「立山胡黄蓮」の図からは「ネバリノギラン」の類が推定される。小論では②を採って推定し、乙項では生薬に分類した。
 - 15) 貫衆はヤブソテツの一種。『本草通串證図』に載る「燕尾貫衆」の図からはヤブソテツの葉の先端が燕尾状に開いた奇形種が推定される。
 - 16) ササウオタマバエの虫癭。「篠魚」、「笹の魚」として知られ、川に落ちるとイワナ(岩魚)になるという伝承がある。『立山草木志』には「箭竹ハ立山ノ麓ニ多シ内ニサ、ノ魚アリ竹筍ノ如クニシテ三四寸箭竹ノ節ニ生ス」とある。
 - 17) 「サツマゴキブリ」、「コバネゴキブリ」など草食性のゴキブリ。

- 18) 『本草綱目』草部17巻には「陰命生海中、赤色、着木懸其子、有大毒。今無的識者」とあり、『袖珍鑑』では「ウミサンゴ」を当てる。『本草綱目』の内容から有毒イソギンチャクの類とも考えられるが未詳。名称は見立てで付けられることもあるので、「ウミサンゴ」に依れば、珊瑚製置物などを出展した可能性も考えられる。乙項では不明とした。
- 19) 生薬で石燕といわれる腕足類貝類の化石。

付表2 出展品の属性分類による生薬・非生薬の割合

甲 項	天 産 物				人 工 物		分類不能	丙項小計・割合	
乙 項	植物類	動物類	岩石類	特定不能	考古類	工芸類	分類不能	小 計	割合(%)
丙項	生 薬	31	19	12	—	—	—	62	29.4
	非生薬	56	21	35	5	9	11	137	64.9
	不 明	4	3	3	0	0	0	2	5.6
乙 項 小 計	91	43	50	5	9	11	2	—	
甲 項 小 計	189				20		2		
分類可能計	209						—		
総 計	211								

凡 例

- ・甲類の「分類不能」は、天産物、人工物の何れか判別できず、付表1甲項では「不明」とした物である。
- ・乙項の「特定不能」は、天産物ではあるが、乙項では何れの種類に分類されるか判別できず、付表1乙項では「不明」とした物である。
- ・丙項の不明は、それぞれ生薬か非生薬か判別できなかった物である。
- ・総計の百分率は、小数第2位を四捨五入したものである。

